

チャーター・スクール 市民が創る公立学校

江南市立布袋小学校	早 川 浩 史
三好町立三好北中学校	山 北 淳
愛知教育大学附属名古屋中学校	今 井 智 樹
愛知県立内海高等学校	藤 井 稔 久
愛知教育大学附属高等学校	原 宏 史

1 はじめに

「チャーター・スクール」という言葉と、一冊の本を通して出会った。今回の米国視察旅行中に、我々が訪れる予定となっているミネソタ大学のハンフリー・インスティテュート学校改革センターで、ディレクターとしてチャーター・スクール運動の牽引役を務めるジョー・ネイサンが著した『チャーター・スクール - あなたも公立学校が創れる、アメリカの教育改革 - 』（大沼安史訳・一光社 1997）である。

いじめ、不登校、学級崩壊、学力低下等、前世紀末に噴き出した問題の解決に向け、日本でも様々な教育改革が叫ばれている。我々はこの本を通して、公立学校を自分達の手でつくるといふ、考えてもいなかった改革が、アメリカで実際に行われ成果を上げていること、また、日本においてもその運動が芽生え始めているという事実を知った。

そこで我々は、この運動についてより深く追究し、日本の教育改革における有効性や将来性について展望したいと考え、ミネソタ大学でジョー・ネイサンに直接話を伺い、また質問すると同時に、現地居住者に対する調査活動を行なうことにした。

2 アメリカ合衆国公教育の現状

(1) 問題点

アメリカ合衆国の公立学校は、官僚制ヒエラルキーの最下層に位置し、7千ページ以上の関連法規に縛られ、独自性を失い、硬直化していた。ネイサンは、先述した著書の中で「アメリカの公教育システムは、献身的で才能豊かな教師たちをたくさん抱えながら、新たな挑戦に乗り出す教師たちを励ますこともなければ、結果を出した教師の努力に報いることもなかった」と述べている。当然のことながら、こうしたシステムの陰で、やる気のある教師や父母はフラストレーションを募らせるばかりで、同様な欲求不満は教育委員会や教員組合、行政当局の間にも広がり、互いに不満をぶつけ合う事態となっていた。父母の多くは、公立学校の現状に不満をもっており、ある財団の調査によれば、61%の人々が地元の公立学校の学力水準があまりにも低すぎると考えているという。

また、金太郎飴（ワンサイズ・フィッツ・オール）のような画一的な学校教育には限界があることも広く認知されていた。

(2) 改革の試み

これらの問題解決に向けた「チャーター・スクール制度」に関連するアメリカの教育改革運動は、1960年代から始まる。公民権運動の中から生まれた学校や「オルタナティブ・スクール」と呼ばれるものがこれにあたる。特にオルタナティブ・スクールには「オーブ